

棚尾地区まちづくり事業

平成 24 年 12 月 19 日（水）19 時～

棚尾公民館 3 階

第 18 回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

大相撲清見潟、土人形、貝殻合わせ、区画整理など

2 テーマ 34 「棚尾のお医者さん」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 テーマ 35 「民話：小谷がつぼ」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

4 連絡事項・情報交換など

「平岩種治郎」展 平成 25 年 1 月 27 日まで 美術館地下 1 階

5 次回日程

第 19 回 1 月 23 日（水）午後 7 時から

「平岩種治郎」「昔の棚尾小学校校舎」

第 20 回 2 月 20 日（水）午後 7 時から

「棚尾神社と忠魂碑」「味噌造り」

「棚尾のお医者さん」

1 要旨

棚尾には現在、奥田医院、長田医院、長田眼科、小澤医院、さいとう医院、さかべ医院、作塚杉浦クリニックのお医者さんがある。私たちは身近なお医者さんのお陰で日々、安心して暮らしている。

私たちの町には昔から多くのお医者さんがあり、健康が守られ命を救われてきたが、遠方から訪れる患者も多かった。

2 江戸時代の記録

江戸時代の記録である各年代の棚尾村明細帳によると次のとおりである。

天明2年（1782） 岡崎藩領の棚尾村明細帳

本道医者三軒 周禎、文達、玄寮

旗本領の棚尾村明細帳

本道医者本間周倫

享和元年（1801） 棚尾村明細帳

本道医者三軒 周禎、文達、玄寮

天保12年（1841） 棚尾村明細帳

本道医者三軒 本間秀吾、文齋、素求

3 明治初期

(1) 協療社（碧南事典）

明治5年（1872）に大浜（新川も含む）、棚尾、平七、伏見屋、鷺塚村の五カ村の医師達が協力して、種痘施術、貧民救済、医術研究の3つの目的をもって組織した団体で、最初は日新社といった。明治4年までに、東浦の山中七一郎（信天翁の弟）などの寄付金、前年から始まった種痘代の収入、医師達が研究費として資金カンパした積立金などが140両にもなっていたので、これが協療社の基金となった。

貧しい人々の治療については、年間15両ほどの薬代が必要と見て、基金の金利で当てることにした。また、対象者の判定、治療券その他は、各村役人と協力して

行うことにした。社員であった医師の活動は、奉仕義務として全て無料であった。

協療社の建物は、菊間藩が廃藩となった時に賜った旧陣屋の長屋の1つを修理して使用した。現在の医師会館の先駆である。この社屋で種痘や月に3回の医学研究を行っていた。

その後、病理研究のために解剖が必要となり、建物と敷地を売却して、明治18年(1885)に協療社の世話人の1人であった石川八郎治の土地(石橋町2丁目)に、局所解剖局(南明舎ともいう)を新築して、年数回病理解剖を行った。その後、明治33年には郡医師会の決議により、種痘料として1人5銭を集めることに決まったが、社中の医師は私のものとせず、協療社の基金に加えて行った。一方、貧困者への救済行為は、時勢の推移によって大正2年頃には有名無実になった。

明治の初期は、西洋医学の進出に対して、従来の漢方医との対立抗争が全国的にあったが、この地方は同じ協療社員として、地域医療や医学研究に手を取り合って協力した。これは素晴らしいことであった。

協療社中姓名

(大浜)：小池貞斎、赤堀青庵、酒井健蔵、都築文恭

(天王)：近藤原賢 (鶴ヶ崎)：小池完二 (久杵)：市古良平 (浜尾)：高橋文龍

(棚尾)：永坂春景、杉邨修平、榊原淳二、三浦文斎

(東浦)：本間周造 (神有)：本田龍益 (二本木)：森逸勝、平松泰造

(鷺塚)：近藤坦平

(2) 戦後の協療会

昭和23年5月に碧南市医師会が誕生した時、この地方の医師が協療社中として、立派な歴史を残していたのに因んで、協療社の名前を残すことを強く望む会員が多かった。そこで、碧南市医師会の福祉や医学研究並びに政治関係は協療会を設立して運営することにされた。

その後、これらの事業目的は諸制度に移り替わり、平成6年には無くなったが、先人の事績を偲ぶため、協療会の名前を残されている。(平成10年医師会史第3巻発行時)

(3) 医師資格制度の変遷

碧南市史第2巻参照

医師は幕府時代においては、官禄のある者は世襲であって、その他は何人でも随意にこれを営むことができた。その資格においても制限がなかったのであるが、明

治7年3月始めて文部省達をもって医制が始められた。同年7月、「医師にあらざる者は、他人に対し診脈あるいは薬品の配剤をなすことを得ず」となったので、その後医師を開業しようとする者には、病院において試業の上、許可すべきことを布達した。

明治16年内務省令により医術開業試験が施行されることになった。これは2年以上医学の教習を受けた者に対し、前期試験（物理・化学・解剖・生理）・後期試験（学説・実施）に合格した者に開業の免許を与えるもので、これに伴って医学校、夜間教習所が開設された。

次に、その一例を示す。

医術開業願

愛知県三河国碧海郡棚尾村461番戸

賢木原淳二 長男 賢木原友太郎

私儀今般碧海郡棚尾村461番地ニ於テ内外科医術開業仕度候間御試験ノ上開業免状御下付被下度依之私塾証書並ニ履歴相添此段奉願候也

右賢木原友太郎

明治16年10月14日

愛知県令 国貞廉平殿

医術業履歴

- 一 明治9年3月ヨリ10年8月迄愛知県三河国碧海郡伏見屋村市古廉造ニ従ヒ1年5ヶ月ノ間漢学修業
- 一 明治10年8月ヨリ愛知県碧海郡鷺塚村私学蜜蜂義塾ニ於テ明治16年10月迄6年3ヶ月ノ間医学内外科修業右ノ通りニ相違無之候也

明治16年10月14日

賢木原友太郎

又、明治39年（1906）に医師の免許が開業医から身分許可へ改正された。

その後、医学校・教習所は大学・医学専門学校に昇格し、大正4年には、全てこれらの学校の卒業生でないと医師になれないことになった。

4 明治以降のお医者さん

医師会史第1～3巻の資料に基づき記述する。但し、第3巻は平成10年発行であるので、生没年などはその時点までの記載である。

尚、現在も開業している医院については「5 現在の医者」で記述した。

(1) 杉村修平（天保9年12月～大正8年2月）

杉村修平については、妙福寺境内に懿文徳碑がある。翁は棚尾の人、父は弥四郎で売薬業であった。財、公成、豊台等の別名が学者文人の常としてあった。

幼より学を好み、妙福寺の和尚秀楷師より句読を、三宅洪庵より書法を学び、19歳の時名古屋に出て、奥田大観より経史を、麻生白処より蘭学を、更に枡田良平より医術を学び、留まること10年にして、慶応元二年頃棚尾に帰って、医者を開業した。その傍らに塾を開いて子弟の教育に努められた。棚尾の生んだ大芸術家藤井達吉も初めこの塾で教えを受けられた。翁は漢詩を好み、有名人とも交友も多かった。幕末の頃、菊間藩侯に召されて二等医となった。

創立当時の協療社員であり、明治9年7月に種痘免許医となっている。

明治末年頃、遠州舞阪へ退去されて子鑑爾、孫、四登志が現在舞坂で開業中である。その旧邸に斎藤又三郎が住んだが、今はそこで近松医が開業している。

(2) 永坂春景（文化10年6月～明治12年1月）

永坂春景は棚尾村15番戸で医を開業し、協療社の創立当時の社員であった。春景の長男永坂一雄は医を継いだが、明治26年7月千葉県へ移住した。

(3) 三浦文達

初代三浦文達（～寛政5年）が医を棚尾で創めた。その後、文敬、文辰、文斎、があった。文辰の長男三浦徳（～明治19年12月）は賢木原に同居していた。

(4) 賢木原淳二

賢木原（さかきばら）淳二（～明治18年7月）は三浦文斎の子で榊原家に養子し、棚尾の中久根で開業し、協療社の創立に尽力した。

何時か判らないが、榊原という姓は多いので賢木原（又は堅木原）と改姓したという。（西尾医談）

彼の長男賢木原友太郎（元治元年10月～明治45年7月）は、明治9年3月から18ヶ月間伏見屋村市古廉造に就いて漢学修業、10年8月から16年12月まで蜜蜂義塾で医学内外科修業、16年12月開業試験合格した。18～19年洋々医館で代診を務め、19年冬家に帰って父の業を継いだ。その後、23～24年に

上京して、順天堂医院、赤十字病院、井上眼科病院などで研究した。日露戦役に従軍し、凱旋の際は、大浜の波止場から乗馬して帰り、上屋敷の若宮神社で式を挙げ、花火を揚げた。彼は勲章を拝受し、肋骨の軍服をよく着ていたという。又、棚尾の文化人グループであった天狗会に、光輪寺の高木晃敬、斎藤倭太郎らと共に属して文化的にも活躍した。

彼の妹、び志は日赤特志看護婦となり、後日産婆になり、彼の跡を継いだ。び志の養嗣子として、歯科の英夫、医者 of 敏夫を迎えたが、共に不縁になり、寺本絹代が養女になった。

(5) 斎藤又三郎（明治21年2月～昭和24年4月）

斎藤又三郎は大正元年11月、志貴屋敷にて開業。町会議員2期（大正15年～昭和9年）勤めている。

斎藤量太郎は斎藤又三郎の母方のいところに当たり、始めは棚尾で開業していたが後、名古屋の中区横三蔵に移った。養子、大次郎も医を業とした。

斎藤勇吉は斎藤又三郎の義兄に当たり、棚尾に生まれ、15歳で洋々医館に学び、更に上京して近藤博士の元で研究し、明治36年前期試験合格、同41年後期並びに実地試験を終わろうとしたが、更に同年9月京都医科大学小児科において研究中、不幸にも同42年2月病に罹り、同43年9月、26歳の若さで没した。

斎藤洋平は又三郎の四男で京都府立医大を卒業し、目下広島のアＢＣＣで勤務中（昭和43年現在）

(6) 近松寅三（明治23年6月～平成7年7月）

近松寅三は昭和24年10月志貴屋敷（斎藤又三郎の後）にて内科開業。昭和30年10月からは嗣子近松良明（大正10年4月～平成7年7月）に譲る。

(7) 永井紺四郎（明治16年12月～昭和42年5月）

永井紺四郎は明治40年5月に棚尾村で開業。大正元年9月、東京帝大医学部小児科で学ぶ。大正4年5月字畑中で開業。地元だけでなく、遠く幡豆郡一円からの患者も多かった。

二代目永井一（はじめ）（大正9年1月～）は昭和28年2月開業。三代目の秀（ひでし）が平成3年10月に碧南市栄町2丁目で開業。

(8) 榊原甚一（明治27年5月～昭和24年2月）

榊原甚一は大正13年2月スイスベルン大学入学、大正14年1月ドクトル試験合格。大正15年4月に字日影にて開業。地元ではドクトルと呼ばれていた。

長男の榊原篤雄（大正11年2月～昭和20年3月）は東京医専を卒業後入隊し、戦死した。

(9) 西尾秀孝（大正13年6月～）

西尾秀孝は昭和35年9月に棚尾本町3丁目（賢木原家の後）で開業した。

趣味も多彩で、俳句の号は芳葩（ほうは）、尺八は懿流と号し、剣道は市剣道連盟会長を13年間務めた。

5 現在の医者

(1) 奥田医院

所在地 碧南市若宮町4丁目

医師 奥田雪雄

診療科目 耳鼻いんこう科 小児耳鼻いんこう科 気管食道耳鼻いんこう科

開業 奥田芳幸（大正3年10月～）が昭和24年10月開業。長男雪雄は昭和60年8月開業。

(2) 長田医院

所在地 源氏町4丁目

医師 長田和久

診療科目 外科、胃腸科

開業 初代長田眼科長田勝太郎の長男鎮雄の息子である長田卓二（昭和8年1月～）が昭和47年11月に開業。現在は卓二の子、和久が開業。

(3) 長田眼科

所在地 源氏町4丁目

医師 長田三和子

診療科目 眼科

開業 初代長田勝太郎（明治9年3月～大正2年9月）は長田久平の二男。幼にして俊敏、妙福寺和尚を師とし、次いで米津亀太郎に就き1年で業を卒え、21歳の若年で医術試験に合格した。後、上京して河本博士の下で研究し、字源氏で眼科を開業した。
勝太郎の死後、勝太郎の弟、長田秀吉（明治23年2月～昭和34年4月）が大正8年10月から現在地で眼科を開業。俳号を光浴と称し、アヲミ同人として、棚尾俳壇の一翼を担った。

勝太郎に2子があり、長男の鎮雄は棚尾郵便局長となり、二男の守夫はトヨタ病院眼科部長となったが、昭和19年3月没した。守夫の長女三和子が三代目として昭和41年4月現在地で開業。

(4) 小沢医院

所在地 若宮町2丁目

医師 小澤博樹

診療科目 内科 外科 胃腸科 肛門科 婦人科 小児科

開業 大正17年3月に小沢きみゑ（大正7年12月～平成3年1月）が字中久根で開業。棚尾の女医さんとして多くの人に親しまれる。

夫、小沢常幸（大正5年6月～昭60年3月）と一緒に昭和24年10月から同所にて開業。昭和27年3月現在地に移転、昭和59年1月に長男博樹が開業。

(5) さいとう医院

所在地 雨池町1丁目

医師 斎藤圭治

診療科目 内科 外科 循環器科 呼吸器科 皮膚科

開業 平成5年10月開業

(6) さかべ医院

所在地 志貴町2丁目

医師 坂部勇 坂部慶幸（よしゆき）

診療科目 内科、循環器科、消化器科 呼吸器科、小児科

開業 昭和32年11月に坂部勇が開業、平成3年7月から子息慶幸（よしゆき）も開業。

(7) 杉浦作塚クリニック

所在地 作塚町3丁目

医師 杉浦勇人（はやと）

診療科目 内科、外科、消化器科、皮膚科、肛門科、リハビリテーション科

開業 平成7年11月に開業。

「民話：小谷がつぼ」

1 要旨

棚尾の民話に「小谷がつぼ」がある。字加須（源氏町及び汐田町の一部）に清水の湧き出る小池があった。昔、旅の途中の「小谷」というお局さまが、ここで産気づき、親切な村人に助けられ出産し、無事旅立つというお話である。

それ以来、この池を「小谷がつぼ」と呼ぶようになり、池の水を飲むと子宝に恵まれると言われるようになった。現在、池は埋められてないが、これにちなみ、近くの堀川に架かる橋は「子種橋」と名づけられた。

2 明治時代の伝承

明治32年に著された「本村沿革記録」は次のとおりである。

古跡 「子谷壺」 子谷ハ小谷ノ文字ノ相違ナラン

所在 字加須、旧時大ノ内ト云、小池今ニ存在セリ、大ノ内、大内ノコトナラン
ト云フ

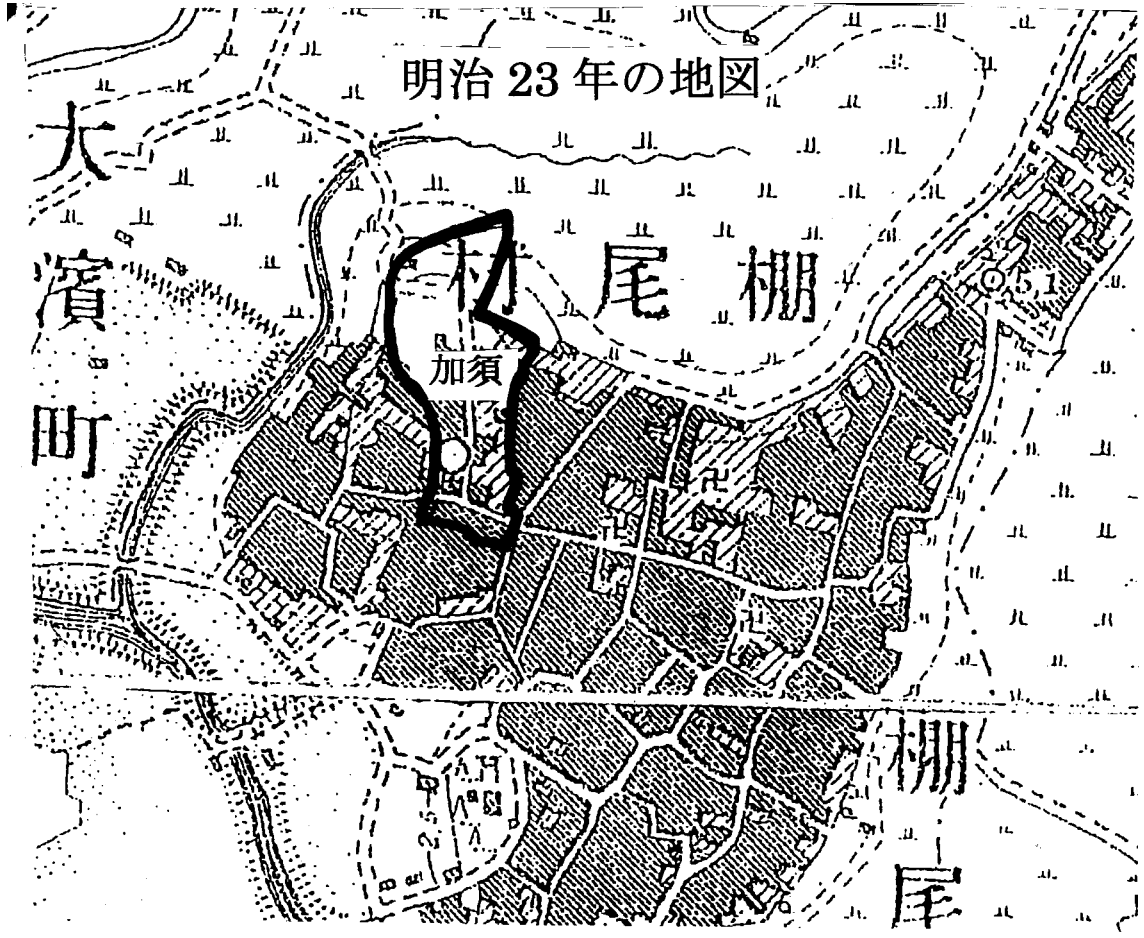
現状 一説ニ、小谷局此所ニテ逝去シタルナリ、小谷壺ト云フ

雑項 子谷壺ト云フハ一池ナリ、此水ヲ飲ムトキハ、必ス懐胎スルコト往々有之、故ニ本村ノ如キ百年以前二百有餘戸ナルモ、自今ノ数千戸ニ増長スルハ、此処ノ水ヲ飲ムヨリ如斯到レリト、古老口碑ノ妄説ナラザルヲ知ルヘシ、又是往昔薬師如来此所ニ有リ、故ニ其ノ水ヲ飲ムユエニ子種ヲ獲ル、故ニ子種壺ト云ウ

3 碧南の民話 「小谷がつぼ」

むかし、大之内（今の源氏町）の岡崎街道のわきに、清水のわき出るはず池がありました。はず池の水はとてもおいしく、村人は、おけをかついで、水くみにやってきました。池は、木々にかこまれ、ほとりにはほこらと小屋がありました。

夕日が西の海を赤くそめるころ、大浜の港で船をおりた3人の旅人が、岡崎街道のはしで休んでおりました。



「しっかりなさいませ。母様になられるお方が、そんな弱いことでどうなされます。さあ、お立ちあそばせ。伊助、手を貸しておくれ。」

侍女のよしのに言われた下男の伊助は、道にすわっている女の人を助け起こしました。女のひとは、大きなおなかをかかえるようにして立ち上がり、つえにすがってそろそろ歩きはじめました。美しい顔は青ざめ、苦しそうに肩で息をしていました。

「このお苦しみでは出産は近いであろう。何としても宿をさがさなくては。」しばらくして、一足先に様子を見に行った伊助が帰ってきました。「よしの様、この先にははす池があり、そばに小屋がたっています。今夜はあそこに泊まりましょう。」

やがて、3人は池のそばの小屋に着きました。中にはだれもいません。土間にはわらとむしろが重ねてあり、石で組んだかまどもありました。せまい板の間には、鉄びんと洗いおけ、湯のみまでありました。よしのは、伊助に火をおこすように言いつけると、わらとむしろでねどこを作りました。

あくる朝、いつものように、はす池へ水くみにきた正平は、赤ん坊の泣き声を耳にしました。こんなところに赤ん坊がいるはずはないと思いながら、小屋の戸を開けた正平はびっくりしました。土間にいる男は、わき差しをぬいて身がまえ、板の間の前で中年の女が短刀をにぎり、わらの中でねている母子をかばっていました。思いもよらぬ光景に立ちすくんだ正平を見て、よしのは土間に両手をつくなり、こうさげびました。

「こちらは、私どもの主人で小谷様、私は、侍女でよしのと申します。わけあって身分は明かせませんが、旅の途中で主人が産気づき、ここをおかりしました。どうぞおゆるしくださいませ。主人が元気になるまで、どうかこの小屋を私どもにおかしくださいませ。」

伊助も、「お願い申します。」と両手をつきました。2人の必死の姿と、わらの中にねている母子のあわれさに胸を打たれた正平は、大きくなずくと、静かに戸を閉めました。

正平は、はす池の水をくみながら、ひとりごとを言いました。「おら、今まであんなにきれいなおなごは見たことはねえ。小谷というお方はよほど身分のあるお局様かも知れねえな。そまつなわら小屋で赤子をうむなんて、気の毒に。」

はす池の小屋にいる小谷主従のうわさは村中に広まりました。水くみに来たついでにおむつや食べ物を分けてくれる村人もあらわれました。こうして、はす池で産

湯をつかった赤ん坊はすくすくと育ちました。

日がたち、菜の花が畑一面咲くころ、元気になった小谷主従は旅立ちました。見送りに来た村人に、何度も礼を言いながら、折戸の渡しから、舟に乗り、東へ向って行きました。

それ以来、はす池は、だれ言うとなく、「小谷がつぼ」と呼ばれ、年をへて「子種がつぼ」と呼ばれました。この池の水を飲むと子宝がさずかるとも、この水で産湯をつかうと、赤子が無事に育つとも言われたそうです。

4 新聞記事

中日新聞平成11年2月7日付け西三河版に以下の記事が載り、紹介された。

古里点描 「民話の舞台を訪ねて」

子どもを授かる喜びは、今も昔も同じ。碧南市には、子宝にまつわる「小谷（こたに）がつぼ」という民話が伝わっている。

昔、大之内（今の源氏町）の岡崎街道のわきに、清水の湧き出る蓮池があった。この地域は海に近く、井戸からも塩水が出たが、この蓮池だけは真水で、村人たちはおけをかついで毎日水汲みにやってきた。ほとりには小さな祠と一休みする小屋があった。

ある日の夕刻、三人の男女の旅人が、このほとりにやってきた。一人は源氏ゆかりの局（つぼね）で「小谷」といい、残る2人は侍女と家来。局は身重で、東への旅の途中に大浜の港で船をおりた後、産気づき動けなくなっていた。

小屋にはわらとむしろが重ねてあり、かまどや洗い桶も揃っていた。「ああ、有り難い。」侍女はそう言いながら、わらとむしろで寝床を作り、主人を横にした。

翌朝、村人の1人がいつものように水を汲みに来ると、赤ん坊の泣き声が耳に飛び込んで来た。中をのぞくと、男女が身構え、わらの中で寝ている母子をかばっている。思いもよらぬ光景に村人が立ちすくんでいると、2人は土間に手をつき、村人に頼んだ。

「旅の途中で主人が産気づき、ここをお借りしました。主人が元気になるまで、この小屋を私たちにお貸し下さい。」土間にひれ伏す2人の姿と、わらの中で寝る母子の哀れさに胸を打たれた村人は、大きくうなずいて、戸を閉めた。

その後、蓮池小屋の気の毒な小谷主従のうわさは村中に広まり、村人たちは水くみの途中におむつや食べ物を差し入れるようになった。そのおかげもあって、蓮池で産

湯を使った赤ん坊は元気に育っていった。

しばらくして局の体が回復し、小谷主従は、見送りに来た村人たちに何度も礼を言いながら旅立っていった。それ以来、この蓮池は「小谷がつぼ」と呼ばれ、池の水を飲むと子宝に恵まれる、この水で産湯を使うと赤ん坊が無事に育つ、と言われるようになった。そして時代とともに「子種がつぼ」とも呼ばれるようになったという。

この蓮池は大正の初めになくなり、今は祠だけが残っている。近くの汐田町に住む長田光子(84)さんが、当時のことを覚えていた。「おじいさん(光子さんのしゅうと)が生きていた頃、村の長老が来て言った。『あんたは仕事を成功させた大人物だが、1つだけ気にいらぬことがある。皆の大切な小谷がつぼを埋めたことだ。』おじいさんはしばらく、頭を抱えていたねえ」。池は工場拡張で埋められたが、近くの堀川に架かる橋に「子種橋」の名が残されている。

この民話を発掘した碧南市の読み聞かせグループ「かざぐるま」代表鈴木富美さんは、「史実に、子どもを授かり育てていく大変さが結びついて、水への信仰民話となったのでしょう」と話している。

5 秋葉神社、稲荷神社

上記の「祠」は現在、汐田町3丁目にあり、秋葉神社、稲荷神社を長田芳雅氏が祀られている。この社の由緒などは次のとおりである。

ア 子種橋の東北たもとに明治44年11月13日、社を建立。大工杉浦喜市

イ 伏見稲荷神社は名倉家庵寺菩提庵より来る。

ウ 北海道組が講を造る。後「十四日組」と称する。 大正6年10月

エ 穴八幡宮(東京高田馬場)を杉浦ようさんが昭和23年1月に合祀する。

オ 昭和47年9月に現在地の長田正所有地へ移転する(遷宮)。

カ 現在も毎年12月15、16日秋葉社本宮の大祭に合わせのぼりを立てられ、お祀りされている。

6 子種橋

(1) 道路新設

昔の道路は現在地より40m程南であった。明治43年頃現在の堀川を新たに掘削して建設し、大正8年に道路が新設された。

(2) 橋名

以前は小種ヶ橋、小谷橋と呼んだこともあったが、現在の橋名は子種（こたね）橋である。

(3) 橋梁台帳抜粋

昭和42年3月架設 延長12.5m 幅員7.05m I桁橋 構造 RC